

米ナショナルジオグラフィックテレビ株式会社が企画しているヤクザのドキュメンタリーからの辞任状★

★犯罪防止および情報源を守るため、原文の和訳一部変更・省略等がある。ご了解ください。

米ナショナルジオグラフィックテレビ株式会社

●●敬具および各位様

貴社が現在作成していますドキュメンタリー「GANGLAND TOKYO (仮題)の業務から辞退する上、給与を返済すると通知します。その理由は二つあります：一つ目は、ドキュメンタリーの内容が事実に忠実であるかを適切な期間内に確認作業を妨げられた事であり、二つ目は貴社が私の紹介先、現地の日本人スタッフ、私自身、そしてその他ボランティアの身と協力者を危険に晒している事です。

同番組の内容に関する深刻な問題について私は弁護士の協力を得て過去幾度にも渡って多くの抗議文を貴社に送り付けていますが、残念ながら諸問題への対応の意が貴社から全く伺えません。よって、致命的な欠陥を抱えている上、大変危険な結果を招きうる当企画の顧問役から私は辞退する上、貴社から頂いた給与を全て返済し、当企画との関わりを一切絶たせて頂きます。

私が当企画に参加することを了承した理由は、貴社が「極道組織は如何にしていわゆる暴力団から株式市場の操作や金融詐欺をしまう大規模な経営組織へと変化を遂げたか」をテーマとした事実を忠実に再現する、知的・洞察的なドキュメンタリー作品を作成することを目標としていることと理解していたからです。又、私は上記のことを一般人に知らせるのが有益であると考えました。更に、関係者の安否を大事に考えて私は当ドキュメンタリーが日本国内で放送されない事を私の参加条件としました（無論、ユーチューブが存在するこの時世には何事もインターネットに載ってしまいますが、私は知識不足でした）。何度かドキュメンタリーの方向性や焦点が一方的に変えられましたが、私は大切な予定を取り止めにするなどして貴社の要望に応える様に最善を尽くしました。

貴社が実は「事実には忠実であること」を重要視していないことを私は次第に理解していきましたが、これを私は非常に残念に思いました。私は当ドキュメンタリーは品質が高く、感情を煽るようなものでない作品になることと思い、関わる人物の身の安全には注意が払われるだろうと予想していました。そもそも私は当作品の事実性(factual accuracy)を確認するために雇われたのであり、後に貴社が指定した一般的な正確性(general accuracy)のためではありません。むしろ、貴社の言う「一般的な正確性」が現代のジャーナリズムの基準であるとするならば、私はジャーナリストを辞めたい気持ちです。大真面目です。これはナショナルジオグラフィックテレビの基準なのでしょ

うか、それとも当ドキュメンタリーだけなのでしょう。一度、当作品の下書きの内容の大きな間違いを複数指摘しましたところ、その指摘はほぼ全て無視されましたが、その時点で貴社はいわゆる「ドキュメンタリー」を作るより、「映画」を作ろうとしていることを思い知りました。

事実性を確かめるために作品に使用される材料を閲覧出来るよう何度か申請をしましたが、ほぼ全て却下されました。無論、材料が手元になればその事実性は確認出来ません。台本の決定版とほぼ完成している作品のコピーですら頂けませんでした。

私の映像が全て作品より取り除かれた件ですが、私は怒っていませんし、むしろ嬉しく思っています。日本国の法律上、業務中に必要な注意を怠り、それによって他人を死傷に至らしめた場合、それは犯罪となり、処罰の対象となります。これは日本の刑法で業務上過失死傷罪と称されています。貴社が問題の映像を放送するかは私の判断下にはないので当企画に関わっている人々にこの至って危険な状況について警告するつもりです。更に、既に裏社会では、当作品および貴社が送り込んだ米撮影チームに対して強い反感を持ち、貴社が当作品に関するどのような指摘をしても無意味だと思われれます。

何よりも一番の問題は、慎重に扱うべきこの事柄に対する貴社スタッフの態度、そして認識の甘さです。撮影の期間中に、当

作品の監督は警察や警視庁、その他団体の方との面会の予定を衝動で突然取り止めたり、無理難題を言いました。上記は余り良い事ではないこと、そして外部の人間を疎遠しかねる行為であると私が指摘しました所、監督が以下のように言い切りました。「君が外部の人間と面目失っても私はどうとも思わない。私は映画を作ろうとしていて、ネタになる人物に近づきたい訳であって、君が紹介した詰まらない人間や学者には用は無い。君のそのくだらない日本人ぶりは今すぐ止めてくれ。面白い人物の紹介のために君は雇われているのに、面白い人の紹介が無いじゃないか。」

企画の始動の当初から私は貴社に極道会の取材の危険性を訴える資料を送りつけてきました。ここ近年、ジャーナリストや重要人物に危害が加えられた事件が多数起きています。それどころか、実際に当ドキュメンタリーの作成中に攻撃を受けたジャーナリストを我々は取材しています。貴社が貴社の映像を見ていれば気付く筈です。

好ましくない報道に対して極道界は威嚇と暴力で対応します。貴社が今も所有している筈の、私が元警察官を取材した映像の中で、彼は以下のように言いました。「やくざが取材を許可したかどうかは関係ない。彼らが気を変えたら取材した内容は取り下げる。そうしなければ人に危害が加えられる。たかが取材内容の出版・放送に人が殺されるに値する価値は無い」

さて、貴社は意外に思われるかもしれませんが、親分の了承を得ずに貴社の取材を受けた極道界の方の心配も私はしています。彼らは所属している組織から処罰を受けるか、反省の意を示すために破門を強要される可能性があります。放映内容次第では、身内の組織に追われる身になる可能性もあります。

極道界の人間も人間ですし、反社会的な行動を取る方が大勢だが、きちんとした方も居ます。伝統的な極道界の役割は基本的に無許可警備業務です。彼らは毎月ごとにみかじめ料を受け取り、その引き換えにみかじめ料を支払っている店や飲み屋で問題が起きた際に対処します。客が泥酔して暴れだしたり、勘定を払わず、店を荒らし、店員に危害を加えたりされた時、彼らが対処する役割でした。彼らの対処の手段を私は認めている訳ではありませんが、彼らは根から悪人であるとは限りませんし、むしろ警備業務に関しては一般民間企業より長けている面もあります。

貴社の下請けの撮影スタッフが来日する前から何度も警告していたにも拘わらず、私が撮影期間中に娘の誕生日を理由に数日帰国した際に、貴社の撮影スタッフは私の紹介先を悪用して東京都内の極道界の人物二名を取材しました。私は同席していなかったのですがどのような条件で取材に応じたか分かりません。彼らが後に、気を変え取材映像の大部分を削除するようお願いしたところ、当作品の監督はその指示に応じませんでした。無論、彼らはこれに対して大きな反感を持ちました。私はこの

事柄に関して何の連絡を受けていなかったもので、後に匿名電話をいただき、始めてその全てを知りました。私が当企画に参加するように招いた人間がこの事件を理由に当企画から辞退していますが、この人は「監督は日本国内に居る私の家族の身の安全のことを全く考慮していない」と言っていました。これを元に我々の友人関係はねじれてしまいました。

もしもある人が自分や友人、そして紹介先が他人によって危険に晒され、その状況をについて何の断りや連絡も受けなければ、それは本人にとって至って不快な出来事だと私は思います。いわゆるパラシュートジャーナリズムの最悪な例です。突然ある地帯にスタッフを派遣してはあらゆる問題を引き起こし、取材が終われば何の償いも無しに引き取るのはさておき、更には時限爆弾のような事態を他人の手元に置いて行くのは以ての外ではないでしょうか。

この事件の後に、私の紹介によってと右翼団体の長を兼任しており、有名政治家と近い関係のある、ある組織の親分と取材が行われました。この取材も私は同席していなかった事を理由に一体どのような問題が起きたか分かり兼ねますが、彼は「約束が違った」と主張しているそうです。彼の方を信じています。多分、現場で、口頭で監督が守るつもりのない約束、いわゆる嘘を言って相手を騙して「面白い」映像をだまし取ったのが実態と思っています。それは記者の倫理違反でもあり、最低です。

彼は待遇に関する不満は私に間接的に伝えられました。極道の親分にとっては、これは傷口に塩なのです。組織の関係者は過去に別組織の幹部であった知人を通してこの事件について知りました。私が知人を通してその取材とは全く関連が無く、作品の編集権も無く、苦情は貴社の事業所に直接するように伝えました。知人は貴社の●●様の所在も聞かれ、私に聞くと答えたそうです。勿論、私はそのような情報は提供しませんでしたし。提供するつもりもありません。要点は知人がこの質問をされた理由であり、それはこの事柄の重要性を我々に知らせる事だったのです。

私自身は2月に実費でワシントンDCで行き、番組のビデオを見せさせた時、初めて同親分が取材を受けた実態を知って驚きました。実名も使われ、顔も隠されていないのです。しかも彼の発言は、場合によって犯罪の証拠として採用される恐れもあります。貴社はやっているのが調査報道ではないのです。単なる情報源の裏切りです。この番組に協力したヤクザは善意を持って口頭約束を信じたのに、貴社は悪意を持って彼らを騙して娯楽番組のために彼らも危険にさらしています。

米国人に聞いてみれば、「口頭約束を信じたヤクザは単なるばかです。書面を確認すべきでした」。それは米国の訴訟社会の倫理感です。極道の世界は違います。極道の世界は男の言動には重みがあります。日本では、「武士は二言がない」という諺があります。その意味は男が一度口頭で約束したら、その約束

を守りきることです。言葉巧みに責任を放置しないのです。

「事実性」を「一般的正確さ」に言い換えたり、「そう言ったけど、文面は違うよ」と逃げないのです。このヤクザたちの過ちは、貴社の監督を信用したことだけなのです。報道の不文律も信じたでしょう。その不文律は「情報源を守ります」とのことです。貴社にそんなことを説教しなくちゃならない事態に至ったのが本当に残念です。日本は報道の真実性を重視します。日本の基準で考えると、現状の番組は「ヤラセ」と批判されかねないところもあります。

「事実性」を「一般的正確さ」に言い換えたり、「そう言ったけど、文面は違うよ」と逃げないのです。このヤクザたちの過ちは、貴社の監督を信用したことだけなのです。報道の不文律も信じたでしょう。その不文律は「情報源を守ります」とのことです。貴社にそんなことを説教しなくちゃならない事態に至ったのが本当に残念です。日本は報道の真実性を重視します。日本の基準で考えると、現状の番組は「ヤラセ」と批判されかねないところもあります。

極道界には極道なりの行動規範があります。彼らの倫理観の程度は低いかも知れませんがやはり実在するものです。ある組織には「窃盗、強盗、強姦等、仁侠道に反する行為に携わる者を破門・絶縁に処する」との決り事があります。この掟が、墨と筆で書き、彼らの事業所の壁に著しく貼られてある掟なのです。

それとは対象に、貴社は私の抗議に対して何度も「制作に関わる人の安全は考慮している」、「君は人騒がせだ」、「我々は最高の倫理基準を持っている」と返答しています。しかし、その「倫理基準」を書面で頂ける様に私が何度もお願いしたにも関わらず、私は一度もその書面を頂くことも読む事も出来ませんでした。振り返って思った事ですが、貴社に顧問役として雇われる前にその書面を要求し、全文を熟読した方が良かったな、と悔やんでいます。

最後に、少なくとも当作品の事実性に問題のある箇所を訂正して頂きたいです。当作品の再現映像の中に元極道の●●氏を●●会を脱退する場面がありますが、事業所の壁に山口組の代紋が貼られてあります。これはこの事柄に何の関わりもない山口組に対する侮辱として見られます。又、ジャーナリストが入院している場面が再現映像としてありますが、これも現実から離れているので取り除く必要があります。これは実際に起きた事とは異なっているので事実ではありません。

給与の返済先を提示して頂けましたら迅速に返済致します。又、今後は私の弁護士を通して連絡をして頂けますようお願い致します。当事柄に関する専門家として、私は貴社スタッフに当事項の危険性を告知するよう勧告致します。貴社が憤慨させました親分は非常に影響力のある方ですし、彼らの組織には英語が堪能で調査能力のある人間も居ます。親分自身も●●●。その事情もあり、本人は極道として面子が法律より先に可能性も

否めません。面子を守るために、法律を無視する行動がないよう祈るしかありません。

当警告が誇張されたものだと思われるようでしたら、暴力団の神経を逆なでにした●氏、故伊丹十三氏、●氏を含むジャーナリストや映画監督、作家●はどうされたのか、調べられることをお勧めします。又、暴力団組長が長崎市長を暗殺した事件も多く知られている事件です。●●組織は真剣に対応すべき組織である事を貴社に理解して頂くように、●●組織の構成員が、敵を暗殺したり、一般人を間違えて殺したり、警察官にも発砲して傷害させた三つの記事、そして●●●に関する記事を一つ添付致します。

最後に、先方の判断次第ではありますが、現地の警察と連絡を取り、当事情に関して問い合わせる事をお勧めします。最後に言っておきます。日本で撮影が行われ、外国人であるが、滞在中の行動に関しては、日本の法律が適用されます。貴社がそのまま番組を放送して怪我人が出たら、貴社と関係者を業務上過失傷害で告訴します。万が一、人が死んだら、警察が自ら業務上過失致死の容疑で調べることになると思います。

尚、質問等は私の弁護士に下さいますようお願い致します。

以上

ジェイク・アデルスタイン